屋上のキャンバス

黄金崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屋上のキャンバス

【Ｎコード】
Ｎ４３３６Ｑ

【作者名】
黄金崎

【あらすじ】
学校の屋上においてある真っ白なキャンバス。「ご自由にお描きください。」と貼り紙がしてある。そんなキャンバスを巡る物語。

長野　1

僕が屋上のドアを開けるとすぐに目に入ったのは真っ白なキャンバスだった。

そのキャンバスの前に置いてある丸椅子の脚に、
「ご自由にお描きください。」
と書かれた紙が貼ってあった。椅子の上にはパレットと筆と赤、青、黄の三色の絵の具が乱雑に置かれている。

誰が置いたんだろう。どうして置いたんだろう。
色々なことが気になったが、真っ白なキャンバスを見ていると無性に何か描きたくなり、ひとまず何も考えないことにした。

誰のものかは知らないが、「ご自由にお描きください。」と書いてあるからにはここにある物を自由に使って構わないはずだ。
椅子の上の物を全て手に持って腰を下ろした。

青い絵の具をパレットに出そうとしたところで、水がないことに気がついた。
「絵描くのって、めんどくさいな……。」

そういえば僕は、美術の授業以外で絵の具を使って絵を描いた事なんてなかった。
これだけ揃っていて、まだ足りないものがあったとは……。

仕方なく、わざわざ下に降りてバケツを探して水を汲んだ。水が入って重くなったバケツを持って屋上への階段を上る。
これは何の部活にも入っていない僕にとっては結構な重労働だ。僕

は一体、何をやっているんだろう。
暇だから屋上がどんな感じか見に行くだけのつもりだったのに。

やっと屋上に着いた。風が心地良い。だけどまだ冬の冷たさが残る。

椅子に腰を下ろして、青い絵の具をパレットに出した。それを水で薄めて筆につける。
そして思い切ってキャンバスの端から端に青い線を引いた。

今日の空は雲一つない快晴だ。遠くに見える海もきらめいている。気分爽快。

だが調子に乗ってキャンバスに青を塗りたくろうとした時、午後の授業が始まる前の予鈴が鳴った。
僕は仕方なくパレットと筆を椅子の上に置き、急いで教室へと戻った。

長野　1（後書き）

初投稿です。よろしくお願いします。どうか大目に見てやってください。

木内　1

放課後、私がいつものように水を入れたバケツを持って屋上に行くと、真っ白なはずのキャンバスに一本の青い線が引いてあった。
それを見て私は少し驚いた。なんでだろう。
いつも「あの人」は私が何かを描いた後に、それに付け足すようにして描くのに。
もしかしたら、他に誰かが来たのかもしれない。「あの人」以外の誰かが。
月曜日の放課後に、真っ白ではないキャンバスに何か描くのは初めてだ。
「あの人」ではない誰かが描いたものに手を加えると思うと少し緊張する。
だけど、「ご自由にお描きください。」と書かれているから、気負う必要などない……はず。
とりあえず黄色と赤の絵の具をパレットに出して筆を取った。
筆とパレットには青い絵の具がついたままだ。「あの人」ならいつも筆を洗って置いておく。やっぱり、違う人なんだ。
まず青い線の下に黄色い線を引いた。そして、その黄色い線の下に赤い線を引いた。
でも、これだけだと何だか味気ない。
私は緑と橙を作り、黄色と青の間に緑の線を、赤と黄色の間に橙の線を描き加えた。
綺麗な五色のグラデーションが出来上がった。
こんなにたくさんの色を一度に使ったのって、初めてかもしれない。
パレットもカラフルだし、キャンバスもカラフル。最初に青い線を引いた人がこれを見たら、なんて思うだろう。気に入ってくれるかな。それとも、「描きたかったのと違う。」って言って怒るかな。
筆を洗っている間、そんなことばかりが頭に浮かんできた。普段か

らあまり人とコミュニケーションを取らないからだろうか。
顔を合わせることさえないのに、新しい人が一人加わってきただけで、色々と考えてしまう。

夕暮れが屋上を包み始めた。
私はいつもの様に、ビルの間に夕日が沈んでいくのを眺めてから帰路に着いた。

長野　2

昨日の続きを描こうと思って昼休みに屋上に行くと、僕の描いた青い線は、虹になっていた。五色だけど。
まさか僕以外にこのキャンバスを見つけた人がいたとは……。
いや、これを描き加えた人がキャンバスを持ってきた張本人だということもあり得る。というか恐らくそうだろう。
昨日僕が友達と一緒に帰るのを断って、放課後ここに来ていたらその人と鉢合わせたかもしれない。
だが今の時点で鉢合わせてしまうと、いまいち面白みに欠ける。
どうせなら、この作品を完成と呼べる段階まで描きこんでから会いたい。
描く人がもう一人いるとなると面白くなってくる。とりあえず何か描き始めよう。
筆を取って意気込んで描き始めようとしたが、早くも躓いた。
五色の虹を七色にしようと思ったのだが、あとの二色が何色か分からない。
適当な色を塗って虹に見えなくなってしまったら台無しだし、わざわざ図書室などに調べに行くのも面倒だ。
五つの線を遠目で見ていた僕は突然ひらめいた。
そうだ。これはカラフルな五線譜だと考えよう。我ながら良いアイディアだ。
五つの色が残ったまま乾いているパレットに水をつけて溶かし、筆でぐちゃぐちゃに混ぜた。
鮮やかな色が混ざり合って様々な色を作り出していく。
それらは混ぜていくうちにみるみる暗い色になり、ついには黒と茶色の中間のような色一色だけになった。
「真っ黒にはならなかったか……まあいいや。」

僕は虹色の五線譜に作った色で黙々と音符を描き込んでいった。

木内　2

まさか虹を五線譜に喩えるなんて……。
これは誰が描いたんだろう？「あの人」かな。それとも、もう一人の人？
私は放課後の屋上でひとり、絵を眺めていた。私は音符が読めないから、この音符が何かの曲なのか、それとも適当に描き込んだだけなのか分からない。
でも私の予想では、これを描いたのは「あの人」ではないと思う。何となくだけど、今まで「あの人」は、こんなことをしなかったと思うのだ。
「あの人」はいつも私が描いた絵の世界観を保ったまま、その絵に合ったものを描き加えてくれるから、背景の青空を描いたりしても、虹に音符を描き込むなんてチャレンジはしないだろう。あくまで推測だけど。
これを描いたのが「あの人」ではないとしたら、どんな人だろう。男の子だろうか。女の子だろうか。やはりこの学校の生徒であることはほぼ間違いないと思う。先生という可能性もあるけど。
　私の考えでは、このキャンバスの存在を知っているのは三人ということになる。
私以外の二人がどんな人なのか知りたい。見てみたい。これは実は、全く不可能な話ではないのだ。
なぜなら二人がこの学校の生徒だとしたら、ここに絵を描きに来れる時間帯は限られるからだ。
まず朝、授業が始まる前。それと、昼休み。あとは放課後、私が帰った後。暗い中絵を描くのは大変だから、これはないと思うけど。
つまり朝早くと昼休みに屋上に行ってみれば、二人に会えるはずなのだ。だけど、そんな勇気はない。
第一、みんながいる時間帯に学校に入るなんて怖くてできない。放

課後でさえ部活帰りの人に見られたことがあるのに。
屋上が少しづつ翳り始めた。できないことを考えている場合ではない。この絵にもっと何か描き加えよう。
やっぱり背景がないと味気ない。空を描こう。虹と言えば青空だ。だけど今屋上から見える風景はオレンジに染まった空と海。虹の背景が夕暮れっていうのも、なかなか良いかもしれない。
私はパレットに赤と黄色を出して橙を作り水で薄め、キャンバスに塗り始めた。
しかし、後から背景を描くのは、結構大変な作業だ。
ここは元美術部の腕の見せ所と言ったところか。
背景を全て塗り終わって顔をあげると、すっかり日が沈みきっていた。早く帰らなくては。
私は少しの満足感とともに、階段を下りて行った。

白川

「あっ、これ、レット・イット・ビーだ。」
あたしはやっと曲の題名を思い出した。たった二小節しか書いてないから最初、何の曲だか分からなかったのだ。しかし、なかなか粋なことをしてくれる。これを描いたのは、たぶん「あの子」ではないだろう。
一昨日の放課後、「あの子」は虹を描いた。でも「あの子」が来る前に、すでに一本青い線が引かれていた。その時は、昼休みに学校に来て描いたのかな～なんて思ってたけど、昨日の放課後、絵を見ると音符が描きこまれてて、「あの子」はそれを黙って眺めてた。それでその後、背景に夕暮れの空と海を描いてた。
朝と放課後は、あたしはいつも屋上にいるから、たぶん青い線も音符も、昼休みに他の誰かが来て描いたんだろう。レット・イット・ビーを書いたその子がビートルズ好きだったら、たぶんあたしと気が合う。まあ合ったってどうしようもないんだけど。
今日はずっとここでその子が来るのを待っていようかな。どうせ暇だし。
あたしはパレットに赤い絵の具を出して、少しだけ水につけて薄めた。そしてキャンバスの右下に赤い傘を描きこんだ。雨上がりに傘を放り出したら、風が吹いて飛んで行ったというイメージだ。
最後に赤い傘の上に、青いリンゴを描きこんだ。少し現実味に欠けるが、楽しげで良いだろう。それに音符を描いた子がビートルズ好きだったら、分かってくれるはずだ。
朝の風が海から潮の匂いを運んでくる。気持ちが良い。寝転んで風に当たってみる。
この場所に居座り始めて、もう八年も経つ。
あたしの時間は八年前のあの時から止まったままだった。
だけど最近絵を描き始め、人と間接的に関わるようになったこと

で、少しずつ、本当にゆっくりだけど、あたしの時間は動き始めたような気がする。

そんなことを考えていると、始業のベルが鳴った。みんな今頃は席に着いているんだろう。やっぱりあの頃に戻りたい……と、少しブルーな気分に戻ってしまった。

長野　3

昼休み。僕は弁当を食べ終わると、そそくさと友達の輪から抜け出して屋上へ行った。

屋上のドアを開けてキャンバスを見た僕は驚いた。

なんか……クオリティ上がってる。

真っ白だった背景が夕暮れに染まってるし、赤い傘がアクセントになっている。それに青いリンゴ……これを描いたのはもしかして、ビートルズファン？

何にしろ、これを描いた人は僕よりも絵心があると見て間違いない。こうなると、下手にいじるのは気が引けてくる。色々考えた末に、空に小さく黒でカモメを描き足すことにした。

三色の絵の具全てをパレットに出し、混ぜ合わせた。またしても、黒の様な、茶色の様な色が出来上がった。それを筆につけて、キャンバスに……

「うわっ！　だ、誰？」

僕は心底驚いた。長い黒髪の女の人が、キャンバス越しに僕を見つめていたのだ。今まで誰もいなかったはずなのに……。

「い、いつからそこに……？」

「えっ、あたしのこと、見えるの？」

女の人は僕よりも驚いているようだった。この人の表情、言動、そして存在感の無さから、僕はなんとなく理解した。

「もしかして、ユウレイですか？」

動揺していた女の人は、少し落ち着きを取り戻したようだった。

よく見てみると、凛とした気の強そうな顔立ちで、結構美人だ。

「そう、ユウレイ。いや～、しかしびっくりしたわ。ユウレイ見える人なんて滅多にいないからさ。」

「それはこっちのセリフですよ。僕だってユウレイなんて、滅多に見ないんだから。それよりその制服、ここの中学の生徒だったんで

すか？」
彼女の顔が一瞬翳ったが、すぐに元の凛とした顔に戻った。
「うん。八年前、中三の時、この屋上から落ちて死んじゃった。って言っても、自殺じゃないよ。君が今持ってるその筆、あたしが友達から貰った大切な物だったんだけど、ここから下に落としちゃったの。運良くそこのパイプの所に引っかかったから取ろうとして、そしたら足を滑らせて落ちちゃった。」
　気まずい沈黙が流れる。僕が何か言うことを探していたら、また彼女が話し始めた。
「なんかあまりにも急だったから、なんも受け入れらんなくて、ユウレイになっちゃった。しかしこうなってみるとかなり暇でさ～。最初は結構楽しかったけど、やっぱ何年も経つと、誰ともコミュニケーション取れないのが寂しくて仕方ないんだわ。で、最近始めたのがこれってわけ。」
そう言うと彼女はキャンバスを指さした。そこで僕はやっと気付いた。
「あぁ、このキャンバス持って来たのって、あなただったんですか！　……って言うか、ユウレイって物持てないんじゃ……。」
「いや～、それが持てちゃうんだな。はたから見れば、ポルターガイストってやつ？」
「なんか軽いし……。それよりあなた、絵上手いですね。美術部だったんですか？」
「まぁ一応、元美術部。だけどあたしが描いたのは、傘とリンゴだけだよ。あと、あなたじゃなくて、白川ね。」
「あっすいません、白川さん。でもじゃあ、虹とか海とか空とかは？　もしかして他にもここに来てる人がいるんですか？」
「そういうこと。あの子、いつも放課後に来てるよ。六月からだったかな。今までずっとあたしと二人で交互に描いてた。しかし今頃になって新しい人が来るとはね。しかもあたしのことが見えるなんて。」

「なかなか奇跡的ですよね。」
「そうだ。もうすぐ絵も完成だし、今日の放課後あたり会いに来てみれば？　あの子もあたしみたいに、なんか寂しそうだったから、喜ぶと思うよ。あ、でもあたしの事は内緒ね。怖がらせちゃうといけないから。」
　そう言うと彼女は微笑み、そして思い出したように付け加えた。
「そういえば、君が書いた楽譜、レット・イット・ビーだよね。ビートルズ好きなの？」
「ええ、まあ、小さいころから親に聞かされてましたから。やっぱり、白川さんもビートルズ好きなんですね。この青リンゴ、ビートルズのマークでしょ？」
　僕がキャンバスのリンゴの絵を指差してそう言うと、彼女は顔をほころばせて答えた。
「そうだよ。やっぱりビートルズファンだったんだ。君とは仲良くなれそうだねぇ。」
「は、はぁ……。」

　一緒にこの絵を作った人、というか霊はなんだか面白い感じだった。
　もう一人は、どんな人だろう。少し興味がある。
　よし、今日の放課後、ここに来てみよう。

木内　3

オレンジに染まる空と海。虹色の五線譜。赤い傘、青いリンゴ。ついでにカモメ。

もう描けるものは描き尽くしてある気がする。この絵はもう完成で良いんじゃないだろうか。私はまたしても放課後の屋上に忍び込んでひとり、考えていた。

突然、誰かが階段を上って来る音が聞こえた。私は慌てて体をどこかに隠そうとしたが、焦れば焦るほど、足がすくんで動けなくなる。結局、ドアを開けて屋上に入って来た人と思いっきり目が合ってしまった。

「き、木内さん……？」

恐れていた事態が起こった。今目の前で私の名前を呼んでいる男の子は、小学校の頃からの知り合いなのだ。

私はどうしていいか分からず、ただ気まずさから俯いていることしかできなかった。

「そっか。僕と一緒にこの絵を描いてたのは、木内さんだったんだ。知り合いだと思わなかったから、びっくりだよ。」

彼はそう言って私に微笑みかけた。

「も、もしかして、キャンバスを持って来てたのって、長野君……？」

「いや、それは僕じゃない。たぶんもう一人いるんだろう。『ご自由にお描きください』なんて、なかなか面白い人だよね。」

そうか。長野君は「あの人」ではないんだ。長野君は、青い線を引いた人。虹を五線譜にした人。昔からちょっと不思議な人だと思っていたけれど。

「それにしても、木内さんって絵うまいんだね。この絵の背景って、ここから見える夕景だよね。なんかこの絵の世界がいきなり広がったみたいで、感動しちゃったよ。木内さん、中１の時、美術部だっ

たっけ？」
私はどう答えたらいいか分からなくなった。彼はどうして私のことなんかを聞いてくるんだろう。今の私は授業に出れない情けない人間なのに……。
「私のこと、変だと思わないの？」
「え？」
「授業に来ないくせに、毎日放課後、絵を描きに来てるなんて、変だとか、ずるいとは、思わないの？」
彼は震えた声でそう言った私を見て、少し驚いたみたいだった。
「う～ん。まあ授業なんて、無理して出るようなもんでも無いしねぇ……僕だって気が乗らないときは休むよ。」
何故だか私は涙が出そうになるのを堪えながら、何とか声を絞り出す。
「でも……でも、いけないことだし……。」
「う～ん。あっ、そうだ。ちょっと待ってて。」
彼は何かを思い立ったように階段を駆け下りていった。一体なんだろう。
息を切らして戻ってきた彼は、ギターを抱えていた。
そして私の前に腰を下ろし、息を整えると、どこかで聞いたことのある旋律を奏で始めた。
すぐに彼の甘い歌声が重なる。
「Ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ，　ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ　Ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ，　ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ　Ｗｈｉｓｐｅｒ　ｗｏｒｄｓ　ｏｆ　ｗｉｓｄｏｍ　Ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ」
思わず堪えていた涙が、溢れてきてしまった。だが幸いなことに、彼はギターに目を落としている。私は急いで涙を拭き取った。
「何事もあるがままに、無理に変えようとしてはいけない。知恵ある言葉をつぶやいてごらん。『あるがままに』……っていう意味なんだけど。まあつまり……あれだ。あんまり無理はしない方がいいよ。」

そう言うと、彼は照れくさそうに微笑んだ。
「あ、ありがと……。」
「あ、そうだ。この絵に最後、何か描き加えない？　これでももう十分だけど。」
「う～ん。赤い傘、青いリンゴ……赤、青……黄色。そうだ、黄色の物を描くとか。」
私が試しに提案してみると、彼は勢いよく立ち上がって言った。
「……よし！　左下に黄色い風船を描こう。」
風船か。良いアイディア。でも右下に傘があるし……。
「……ちょっとくどいような気もするけど。」
「明るすぎるくらいの方がいいよ。二人で一つずつ描こう。」
そう言うと彼は黄色の絵の具をパレットに出した。私は筆を使ってパレットに水をつけ、黄色の絵の具を薄めた。
そして私たちは二つ繋がった黄色の風船を描き加えた。

……こうして、翳りゆく屋上で、一つの作品が完成した。

木内　3（後書き）

エピローグ

それからも、僕は何も変わらない生活を続けている。
少し変わった事と言えば、授業中に暇を持て余した白川さんが時々ちょっかいを出しに来るようになったこと。あと、少しづつ、木内さんが授業に出るようになったこと。それくらいだ。他は何も変わらず、授業を受けて、友達と弁当を食べ、

昼休みには、屋上に絵を描きに行く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4336q/

屋上のキャンバス

2011年1月30日02時22分発行